本校の進路指導について

―― 進路に関する啓発的経験を与える指導を中心として ――

足利市立坂西中学校　横塚康男

Ⅰ はじめに

平成5年2月の文部省の次官通達から，中学校の進路指導は大きな転換を迫られた。本校でも，進路指導の年間指導計画の見直しから始まり，さまざまな努力がなされてきた。

中でも，本校で一番重点を置いたのが「指導時間の確保」(各学年とも，年間10～13時間程度）であった。その他，職員向けの『進路だより』の発行などによって，進路指導の必要性について訴え続けてきた。

しかし，実際にはさまざまな学校行事などの学級での取り組み時間に，進路学習の時間があてられてしまい，年間指導計画に明示されている指導時間が確保できていないという事実が，ある調査によって明らかになった。

そこで進路指導部としては，指導時間の不足分を補うために各学年主任と協力して，夏季休業中に進路に関する啓発的経験を与える学習課題として以下のものを課することにした。

第1学年：『二日間お母さん』

第2学年：『私立高等学校調べ』

第3学年：『卒業生に聞く会』

Ⅱ 実践の概要

1 第1学年：『二日間お母さん』について

中学校生活にようやく慣れてきた中学1年生なので，自分の家庭でできる課題が妥当であると考えられるため，この課題を設定した。

(1) 実施方法

ア 事前指導

家庭訪問期間中に全生徒を集め，進路指導主事と学年主任でこの課題を設定した理由やこの課題のねらい，課題に取り組むにあたっての注意事項などを説明する。

イ 実施

生徒は，自分の都合のよい連続した二日間を決めて，母親の手を借りずにこの課題に取り組み，レポートを書いて学級担任に提出する。

ウ 事後指導

学級での発表会など実施するように働きかけをする。今年は校内現職教育が学級活動の授業研究で実施されたため，また，授業参観で取り上げたクラスもあったため，すべてのクラスで発表会が実施された。中でも授業参観で実施した学級の担任は，お母さんたちの感想を聞くことができて大変よかったと言っている。

各学級から男女各1名の優れた取り組みがなされているレポートを学級担任の先生に提出していただき，進路指導部で印刷物にして全家庭に紹介する。

⑵ 補 助 資 料

ア 「お母さんの一日」 B4版1枚

「あなたのお母さんが，家族のために毎日やっていることを時間を追ってすべて書き出してみよう。」

時　刻	お母さんのやっていること	注意事項など

というプリントを事前指導時に渡す。

このプリントにたくさんのことが記入できる生徒が，優れた取り組みをした生徒のレポートの作成者として学級担任の先生から選出される場合が多い。

イ 提出用報告書 B4版1枚

実施した日

あなたが家族のためにやったことを時間を追ってすべて書き出しなさい。

家族の人に感想を書いていただきなさい。（なるべく多くの人に）

あなた自身の感想を書きなさい。

⑶ 提出された報告書から（平成7年度実施分）

ア 男子生徒の事例

母親の感想

いろいろやってきて，上手にきちんとできなくてもいい勉強になったね。いっしょうけんめいやってくれてありがとう。とても助かりました。

そしてこの宿題を出した○○先生にもお礼の一言，○○には夏休みで一番良い勉強になりました。

本人の感想

僕は，家の手伝いはしたことがあるけれど，窓拭きや廊下を拭いたりしかしたことがないので，お母さんの仕事のほんのわずかしかやったことはありません。だから1日目にお母さんから仕事を教えてもらったとき驚きました。朝早くから起きて，父さんのお弁当を作り，夕食の後片付けをしなくちゃならないのでとても大変だと思いました。とにかく一日中動き回っていなくてはならないので大変でした。特に大変だったのは父さんのお弁当作りでした。うちの父さんは朝の6時ころ家を出るので，朝の4時半ころ起きて朝食とお弁当を作るのがとても大変だった。やっていてそう思った。だからお母さんの仕事を少し，僕が手伝ってあげれば，お母さんも少しは楽になるんじゃないかって気がする。いつもこんなに仕事をしているお母さんはやっぱりすごいなあって思う。たまには体を休めてほしいと思うな。

イ 女子生徒の事例

父親の感想

本人以上に母親の料理の勉強になっていたようです。これも良い一つの家族の交わりと思っていま

す。食べ終わってすぐ次の食事の準備を始めるくらい食事作りに力を入れていたようです。2日間で母親の仕事の大変さが充分分かったようで，とても良い夏休みの課題であったと感謝しています。

母親の感想

2日間楽ができると喜んでいたところ，娘の家事等を横で見ていて不安になったり，いらいらしたりとかえって疲れてしまいました。娘の課題と同時に私自身の生活を見つめ直す良い機会を与えられたと思っています。

本人の感想

朝早くから夜まで大体立ち続けて，本当にハードな感じがしました。疲れてしまいました。料理，清掃のこつがなかなかつかめず，苦戦しました。それなのに母は私の習い事の送り迎えをしてくれて，毎回「疲れたー。」とソファーに横たわるのも分かるような気がします。毎日毎日私たちのために大変なお母さん。改めて，「ごくろうさま。」「ありがとう。」と言いたくなりました。私から見た母が変わりました。

(4) 考　　察

勤労の尊さや意義を生徒たちに理解させることを最大のねらいとしているのが，この「二日間お母さん」である。このねらいは，教室内での座学の進路指導によっても理解させることはある程度可能であると考えられる。しかし，頭で理解できたからといって，それが生徒たちの将来の職業生活に確実に結び付いていくのかと考えると，はなはだ疑問である。

生徒たちはこの課題に取り組むことによって自己理解をしながら，同時に一番身近な母親という存在の偉大さに気付くことができる。生徒の報告書の中で，母親の炊事・洗濯などについてのマイナス面の評価が皆無に近いことがそれを物語っている。「掃除は，力がある男のお前がやった方が家がきれいになった気がするぞ。」と父親から褒められたある生徒は，その後も不定期ではあるが，家の掃除を進んでしているようである。

また，この課題は，取り組んだ結果，すなわち家庭での評価がその場で得られることも特徴の一つと言えるだろう。座学の進路指導にあっては，学習内容がどれくらい自分のものになったかを知るにはそれ相応の時間が必要である。家族からの「美味しかったよ。」，「また作ってね。」等の一言によって生徒たちが働くことに対する意欲をどれだけ喚起させることができるかは想像にかたくないだろう。

今後の課題としては，一人一人の生徒たちが父親の職業に目を向け，自営業ならばその手伝いを，会社勤めならば，会社訪問をしてみようというような意識付けができるような指導を学校でしていくことが考えられよう。

2　第2学年：『私立高等学校調べ』について

県立高等学校で，中学3年生を対象に実施している「一日体験学習」を中学2年生を対象に実施してほしいという要望は，なかなか実現されない。中学2年生の段階で「行きたい高等学校」での体験学習ができれば，生徒は1年以上の期間努力することが可能になるからである。上級学校について学ぶのも，中学2年生の進路学習内容である。

本校では，せめて私立高等学校だけでも自分たちの力で，自分たちの知りたい情報を得させようということで，この『私立高等学校調べ』を実施することにした。

(1) 実 施 方 法

ア　事前指導

私立高等学校についてどんなことを調べてほしいのかを全家庭にアンケート調査を実施し，その結果を進路指導部で集計し，調査項目を決定する。アンケート用紙を家庭で記入するときに，不足がちな進路の学習の少しでも足しになればということも考えて，親子で記入させることにしている。その際，「どのくらいの成績（偏差値），学校のテストの順位で合格できるのか。」といったような質問に関しては，第一学期のPTA学年部会のときに，「入れる高等学校から，行きたい高等学校へ」の指導の転換について十分に説明し，調査項目から除外したことを保護者に理解していただくようにしている。

また，中学校としては，調査対象の高等学校に対して学校長名による「夏季休業中の本校生徒の訪問について」という依頼文書を送付しておく。

イ　調査対象高等学校

白鴎大学足利高等学校　足利短期大学附属高等学校　足利工業大学附属高等学校
佐野日本大学高等学校　弥生女学院高等学校　國學院大學栃木高等学校　桐生第一高等学校
樹徳高等学校

ウ　調 査 項 目

設置学科　取得可能な資格　学科の学習内容　進路状況　教育方針　校風　諸経費　進学状況
部活動　本校からの進学者数　募集定員　生徒の男女比　推薦入学制度　推薦・特待の免除内容
国公立大学への入学状況　カリキュラム　出願方法　いじめ　最寄りの駅からの距離　校則
アルバイト　通学方法　修学旅行先　外国人教師　学校行事　上級生と下級生との関係

内容的に重複しているものもあるが，親子で考えたということを尊重したいのでそのまま調査項目として提示する。

エ　調 査 方 法

各学級の班単位で調査する。（1学級6班制）

必ず全員で高等学校を訪問する。

教室の掲示物用として模造紙1枚，印刷物用としてB4で2枚以内に調査結果を自由にまとめる。

オ　事 後 指 導

第二学期の学級活動の時間を1時間使って，各学級で「私立高等学校調べ」発表会を実施する。

本年度は，校内現職教育の研究授業が，「道徳・学活」の番に当たっていたため，研究授業にこの「発表会」が取り入れられ，生徒たちへの学習の定着が十分になされたと考えられる。次年度も同様な機会が与えられることを強く望んでいる。

また，第二学期のPTA学年部会で，調査したそれぞれの高等学校の中で最も優れた模造紙1枚の掲示物を進路指導部及び第2学年職員で選び出し，当該班の生徒全員によって保護者の前で発表させる。B4で2枚以内のものについても，それぞれの高等学校毎に一番優れたものを進路指導部と第2学年職員で選び出し，冊子にまとめて全家庭に配布する。

カ　生徒の感想

簡単なアンケート調査を実施してみたところ，生徒のおよそ2／3が「役に立った課題だった。」と回答している。生徒の声をいくつか紹介してみよう。

(ア)　授業を見学したかった。

(イ) 今度は，各自が行きたい高等学校を調べるようにすればいいと思った。

(ウ) 私の知らなかった高校のことが分かってとても良かった。

(エ) 男子は男子校，女子は女子校のみという方が良いと思う。

(オ) 部活動を見学したかった。

(カ) 今までちゃんと考えていなかった高校生活を考えさせられました。また，自分は何のためにどんな高校へ行きたいのかを考えるようになりました。これからのことを考えるいい機会になりました。

(キ) 私立高校に対する理解が深まったので，調べて良かったと思いました。

(2) 考　　察

生徒が自分たちで私立高等学校に出向いて，自分たちの知りたいことを調べることは，「進路情報を得る」という意味においてとても大切なことである。各学級の生活班で調べるため，男子高校に女子生徒が，またその逆に，女子高校に男子生徒が調べに行くということも出てしまったが，生徒たちは未知の高等学校に興味津々で，喜々としてそれぞれの高等学校を訪問していたようである。

中学校の進路指導の一部である「進学指導」にあっては，学校が生徒や保護者に対して面倒を見すぎているのではないかという気がしてならない。「入れる高等学校から行きたい高等学校へ」が進路指導の根本にあるのならば，「行きたい高等学校」探しの援助をするのが中学校の使命であろう。情報化時代の中にあって，生徒が自分にとって必要な情報をいかに獲得するか，また，自分にとってその情報が必要か，必要でないのかという「情報選択能力」を育成することが本課題の最大のねらいである。

今後は，卒業生への進路の「追指導」等を継続的に実施することで，生徒たちが作成した資料が年々充実していくように努力していきたい。

3　第3学年：『卒業生に聞く会』について

本校では，「偏差値を用いない進路指導」の実践が始まった2年後に，卒業生への「追指導」として進学者に対するアンケート調査を実施した。その結果，自分の意志で進学先を決定したと回答している生徒の中にも，中学3年生のときの学級担任の先生にどんなことを一番教えてほしかったかという問いに対して，そのほとんどの者が「高等学校の中身について」教えてほしかったと回答してきた。

そこで進路指導部としては，夏季休業中に本校出身の現役高等学校2年生に来校してもらい，自分の高等学校での生活について，中学3年生の前で発表し，中学生からの質問に答えてもらおうと考え，この課題を設定した。

(1) 実　施　方　法

ア　事前指導

各学級に来校してほしい高等学校をアンケート調査する。要望の多い上位10校程度を選び，事前に発表内容の打ち合わせをする。発表内容については，第2学年の『私立高等学校調べ』の「調査項目」と重複する部分がかなりあるので割愛する。その際，出席してくれる生徒に，自分の通っている高等学校の学科の一週間の「時間割り表」を提出するよう依頼する。実施日までに印刷し，参加する本校生徒に当日配布する。

イ　事後指導

会の終了後，各学級で参加した生徒に感想を書かせる。

(2) 考　　察

この取り組みは県立高等学校の一日体験学習や，本校で実施している『私立高等学校調べ』と重なりあう部分が多い。しかし現役高校生の生の感想が聞けるところにこの取り組みの価値があるといえる。当日は，質疑応答の時間も設定されているので，質問内容によっては一日体験学習や『私立高等学校調べ』などでは知ることのできないような高校生活の情報を得ることができるはずである。そのためには，中学3年生の夏休みまでの段階で，生徒一人一人の進路意識がかなり高められていないとうまくいかないようである。

本校の質問内容を分析すると，やはり普段からの進路指導をより充実させていかなければならないと考えざるを得ない。例えば，高い頻度の質問に次のようなものが上げられるからである。「校則は厳しいですか。」「アルバイトは学校で認められていますか。」などがそれである。

今後は，「なぜ高等学校に進学するのか。」というような根本的な事柄を追求していくことから進路指導を充実させていかなければならないと考えている。

Ⅲ 今後の課題

1 進路に関する啓発的経験を与えることについて

教室内での座学の進路学習も大切であるが，生徒の体験や経験を重視した進路学習が今後いかに大切なものになっていくであろうことは，誰にも異論を差し挟む余地はないだろう。これまで述べてきた本校の実施しているような体験学習を支えるものとして何よりも尊重されるべきものは，学校の進路指導に対する次のような基本的な姿勢であろう。

言葉によるものだけでない進路指導の改善を，生徒や保護者に向けて学校がしていくこと。「偏差値を用いない進路指導」の名のもとに，従前の模擬テストまがいの学校自作テストの結果に頼った，いわゆる「進学指導」をしている限りは，学級活動での進路指導も生徒や保護者には決して理解されるものではない。生徒やその保護者そして学校が，その生徒が進学を希望する高等学校の合格の可能性を知ろうとすることは，決して無意味ではない。「合格できそうにないから別の高等学校にしよう。」という考えが先に来てしまっては「行きたい高等学校へ」の進路指導は実現できない。「将来○○という職業に就きたい。」という明確な希望を持たせる進路指導が実践されているならば，別の方法による希望の実現を教師と生徒がともに考えることも可能であるし，それも難しいようであればその職業に近い職業に就くことを生徒は考えるようになるはずである。(「働くことの意義」などの指導が十分になされているという前提にたって) 本校では，2年前より3年生の進学先決定のための補助資料として活用するための学校自作テストを実施することをやめた。このことによって，「中学校は高校受験に対して何もしてくれない。」という考えよりも，「中学校の先生も我が子の進路に真剣に取り組み始めようとしてくれているのだ。」というふうに受け止めてくれていることが確認できたのは，『私立高等学校調べ』の調査項目決定のアンケートで，進路指導部が予想していたよりも「どのくらいの成績で合格できるのか。」という質問が思ったよりも多くなかったことに反映されていると思われる。(全回答の5％程度)

必要に応じて，進路指導の場面で生徒に進路に関する啓発的経験を与えていくことによって，一人一人の生徒たちが，「取りあえず高校へ入ってからその先のことは考えよう。」(普通科志向の増加) ではなくて，「私は将来○○になりたいので○○高校へ行きたい。だから○○高校のことについてもっと知りたい。」というように考え，日々の学習に意欲的に取り組んでいけるようにしたいものである。

2　段階的な啓発的進路学習のために

進路指導は全校をあげて，日々のあらゆる教育活動の場面で実施されるべきものであることは，衆知のことである。しかし，実際の教育現場にあっては，学校行事，学年行事などに追われて学級活動での進路指導の時間の確保に戦々恐々としているのが現状である。そんな中で実施する進路指導ということであれば，地域や学校の実態に合っていて，なおかつ生徒の発達段階に即応したものであることが望まれるのも当然のことである。

本校では，1年生には「働くことの意義を知る，働くことの大変さ，働いた後の満足感」，2年生には「学ぶことの意義を知る，学ぶための方法」，3年生には「学んでいる人たちの苦労や満足感」を知ることを最大の目標として進路指導を実践している。この取り組みを補完するために大切なことは，何といっても学級活動での進路指導の充実であろう。最近の生徒たちは屋外での「遊び」や「体験」が不足しているとよくいわれる。また，生徒たちの各家庭にあっては，昔のように「家事の分担」ということもほとんど見られない。それでも生徒たちは，これらの体験的な学習には意欲的に取り組む。感想を求めても，大変だったけれど面白かった，というものが多い。この面白さを次の段階に高めていくために，それぞれの学年や学級での進路指導が求められるのである。生徒たちが楽しかったからそれでよいというものではない。とは言っても，指導時間の確保そのものがままならぬ現在の中学校における進路指導に少しでも役に立ちたいという願いを込めて本校の実践を紹介した次第である。

評

進路指導においては，人間としての生き方についての自覚を深める中で，将来の職業的自己実現を図るのに必要な能力と態度を育てることが大切です。

このような中で本実践は，進路を主体的に選択できるような能力・態度の育成と，望ましい職業観の育成をめざし，自校の中学生にとって真に必要としている進路指導の在り方を追求し，中学3年間を見通した計画の基に実践を積まれました。

具体的に実践の概要を上げてみますと，1年生では生徒にとって最も身近な存在である母の仕事に着目し，勤労の尊さや意義を体感させ勤労観を磨き，2年生では，一日体験入学を実施していない私立高等学校について，生徒自身が目的意識を持ちながら，自分たちの知りたいことについて調査してくるという活動を取り入れています。さらに，3年生では一日体験学習や進学説明会だけでは知ることができない本音の部分を，高等学校在学中の先輩を招き「卒業生に聞く会」を設けるなど，生徒の発達段階に応じた系統的な指導計画をたて，体験的な活動を通した進路指導が実践されています。

本実践記録は，かつて進学指導に偏りがちであった進路指導を，進路に関する関心や意欲高め，目的意識をもって生活していこうとする態度を助長させ，進路について主体的に選択・決定できる能力を育成するという，進路指導本来のねらいを達成するという点において大いに役立つと思われますので参考にしてください。